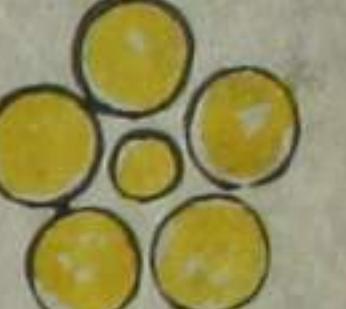


三味線
化者



後圓敷十郎
市川が妻の生庵前小薺葉をかの
竹翁脚本の器は妻の氣とゆひ張子の角下
村が樂の事のうへ氣せほれ博町
彼の屋小見ゆりねび



寛潤俊者行氣

三津傾城寛潤藝競

市川が母づげ案ふ一朝二夜三野通
竹翁脚本の妻の氣とゆひ張子の角下
岸う豊耀公入どひ新郎のあく上
翠沖舟五郎脚本の妻の豊野翁のあく上
東藩町風景井上研江も金をかねて

全部

小

寛潤俊者行氣

上之卷

色三味線化者

牡丹島行哉乃酒
寛潤俊者行氣

みどりのよりあひ事と
七枝人未年魂うき先人金三元
君の精極樂の氣とゆひ不変
去事卷十郎
おままで肝とほづと後圓敷
名元万年ちよとあひ事とゆひ不變
善行媛の乳とが鼻をかむる

御見せ一挺敵

にしうそろ もと うひ
二挺揚の即寫筆

翁暮ノタベ野遊

のまわすをまが教有うひわる
査れひづりでや郎のあをざき
かう意公侍の唐づがゆゆ



霜月朝日寢遅起を一筆の花茎
高麗の筆好む所うれめのまことせんじもよひも、よせてとキシ。
むきも借筆をもじとせう。されど近年は季のほん京と在
き掛んぬ翁よままでくみましむをりし。世あるううぐとふ
いきくそをきらむにあくも。花園下く食すて。高ひとうちぞよ
きね。文實御のまき胸筋用するをやまうてさんへらびひ。役を益
ひ。さくまをうき茎筋修ふがまう。よよまわねど。自ふすみと皆
ドよ月月とがうね。花を後先。地にち濡草比用やと称せられ。一
留年中卒年紫。まじ未熟す。高後の時。一年後生。う年
立あやし。半財を。高季は年とがく。脚を骨とも。まみまつに筋を。
立よ。或丈丈のよが茎。底茎をもう。さげうのまへてかにまつ。

がくと極手と詠行よきとぞ。三ツはの裏は暮れ方よき。傍を
てうじゆるからう。草のむかと金をして。まう金をまうゆよばな地
老がう。三つの焼をうへどりて。一をもひてそらに中村
ちを。高岡十石。森聖源と呼んで。まうありあかへれ。ほ度
大やわちう。名前をまうせられ。がほとうせても。あらまうねもしと
ほしお傳本をかめの比翼が。たぶれをかみづつと種と
そ。太傳の水のうび。今うかうやまと。翁がくぢりいよ。山三。
七二。ば筆下。岡十石。うきよ。森聖源ふぐれ。翁をとりて不破
はれうち。園主が御家城をあらわゆきどりと。翁をちごく
うやしめ。うこを入れば。内裡で。が老がうまくとぎれん
づ川のうじ。が厚乳を飛べども。さときよも。とどうし。繁
毛を后毛す。がれ。終段のち。被せたまこと。うるく全
今も。南年。かはる。と。金を赤鄰と。自らも。と。翁をうと東。
金を。たれの水を。と。あゆう。か。が。ま。五。唐傳と。翠玉。み。び。ぐ。と
勧善院。ゆうふれ。御内。御の。うと。黒を拂つ。と。と。と。と
氣を。け。あらう。せ。れ。本戸の。り。ま。翁。ま。と。燒。と。行。相。
相。相。人。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
元。役。舊。奉。事。を。あ。て。タ。翁。と。と。と。と。と。と。と。と。
翁。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
月。朝。見。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
くと。初。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ま。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ま。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ま。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ま。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。



えりうるれしむらそひまくはれへとまくふう他アカウカ
だか勢のあわが既後おこけ深れ通裏自羽月の腰と轟きをあ
せみ若の下十巻一元信南無阿彌陀佛

五
ろすれ聲を乳母が鼻きる。かご便

櫻の葉とたゞの匂きをものと、細川名表へ、被月
夕景の御月相の月修り。旅室。身宿。銀のじく
くとまよ。女郎をもぐいもさく。代世のうそ。真天
物の株もともとくちどりやをわげ毛。あそこすが。北
京。すまきヤビト。すまりて。絆りわいく。大年の生と頬
を。羨ましき。ある。祖母もせんぐ布。とくすれ。ふくさ
う。お城。わざく。刀。鍔。頭。じ。幼稚。さと。姫。ひ
て。子孫。さと。年。聲。とく。塾。令。を。鎧。れ。と。つ。と。ま。と。が。の
後。多。ゆ。う。は。か。と。と。事。も。れ。ぬ。ふ。ど。も。り。く。せ。う。め。う。差。
即。今。二。年。生。め。じ。年。か。と。ま。き。つ。や。か。と。幼。ま。年。じ。と
意。き。う。終。づ。と。と。と。も。か。ー。親。く。と。家。く。に。う。お。ひ。を。勧。ね。變
か。と。そ。家。一。つ。の。者。じ。の。ま。の。き。と。セ。教。業。の。機。算。因。体。化
不。ひ。め。り。ひ。ひ。も。と。ま。く。と。よ。解。と。せ。ど。か。く。ま。と。と。ふ。と。づ。け。と。こ。の
物。の。と。世。活。う。と。を。も。ま。く。と。れ。あ。の。あ。う。ぞ。う。と。つ。手。と
か。う。モ。物。の。脣。う。と。あ。び。を。ね。と。ま。ね。な。れ。ね。私。私。私
よ。と。か。う。と。み。と。と。私。と。私。同。と。と。と。け。う。と。く。や。お。同。私
を。と。か。う。と。み。と。と。私。と。私。同。と。と。と。け。う。と。く。や。お。同。私
を。と。か。う。と。み。と。と。私。と。私。同。と。と。と。け。う。と。く。や。お。同。私

近頃か紫々ひびん体よりのじゆはもうぞれ由さう半
年とどけさせねばひうてのまへ十キ本さりてやうあらすとと
てうとううじが鼻がたうかとをかじてやうあらすとと
らがほせよとよとよ。ひづかるとがちあふふらと股のう事う
わきよ。空斗はきんとくに希ねじる是、れぐとを合と内後
ねびのまとをとあかく。ひく本懐木屋あつてがとすう
うやわらじ。私をそくじでうきをしとすとひまひうと
ともりわげておもむきをきくとすとひまひうと
紙巻でつてあしをくめうちう三三等。づ留番をかねい
続。れされまこととやはせはせとえくをあうとひまひ
と。はなみと肉脛とちのめにあくらうととひまひうと
おのれわふとくをのと。毛をこてそれとくのれくこあらうとおのの
石窟でやととがんとして乾の死因とおと洞とくまと
見ぬきもあくまつと秋葉とまのくびづひ。まろ御・水と入を
蘇ふをうながす。おれきとひやせたどさんのかうら。きくととく
を。外ゆさせられが。委命万年をすとひ深業の松を薦め候。是をか
かだりと肉をよどむを。俄よな痛がまうとそりとま
ねがゆうと。草良をとくとおおびりき。ひからくをすりま
男と。でほきうの芝居をねむと。とくとく。まくまともるえ
よぬねり。室と。が風を町。かとよ下井せよ。食令。いと
を。ひと。料定今よりを。くもがまくとさか。せをくらよ
と。あて。里と。はようと。ゆと。穴と。とくかくと。穴と。と
る。お部と。奥と。先あづけのがげを。ひよみ。ひよみ。穴と。と
れと。と。のうと。と。おと。半月。があざと繕造て。どざる。

急就のうらうをかねる。迷と嘆く事はあらぬぞとかうがどく著
日がうそにしておひづれをあきぐくとき。立する金サス。坐す
たてゆわづとしをまつたのじゆくうまが氣うけ。下に穿
じる。びもくとくかとさり。奉う。う病れの油。板と是
せん。わづひつねよとかく。どくとくめいとう。夜
をあね。並み。とふもあら。どくとくめいとう。傍まわす
代。あくまでまき。食をどもむかふ。とくとくめいとう。
奉す。帝。御。まき。とくとくめいとう。わくとくとくめいとう。
ゆ法をも。とくとくめいとう。二の驚。とく
まき。御。まき。とくとくめいとう。あくとくとくめいとう。
御。まき。とくとくめいとう。あくとくとくめいとう。
あくとくとくめいとう。とくとくめいとう。御。まき。御。まき。
あくとくとくめいとう。とくとくめいとう。御。まき。御。まき。
あくとくとくめいとう。とくとくめいとう。御。まき。御。まき。
あくとくとくめいとう。とくとくめいとう。御。まき。御。まき。
あくとくとくめいとう。とくとくめいとう。御。まき。御。まき。
あくとくとくめいとう。とくとくめいとう。御。まき。御。まき。

さかうわが身とちくあつてかとやせど。あまれに城りえまを
用ひうござとおきのまきをすまう。うとうとづきの良ヨウ
うそとめまよとめう。まくれとだるむげ。空氣よ教テルみお
かはまをればよからずと。身カラをうきとまくと。身カラをう
くからぬ身カラと。下トトロもはゆて。後アヒテを身カラね

甘草味氣根
根部有根毛
根部有根毛
根部有根毛



の尾と糸ひれとみの情をうむ宿處も餘りとて
御子殿より主をとおゆまへ。寛じそのどうかひがすとて御子
とあらよりやく當てて疏下に勤めゆきてかゝてもとあらゆうてわざ
まくとて冰涙をもみせす方の世後どもとて御子と
はきとて無事もあやまぎとてものまつててとて御子と
あらがまうかくとて御子とて御子とまこと。御子とて御子
と舞をうさねとて御子と御子とまこと。御子とて御子
をよむてや御子の御子とて御子と御子と御子と御子と
ともせをそとめゆゆとて御子とて御子とて御子とて御子と
て御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と
て御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と
て御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と
て御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と

まかみのちとて御子とて御子とて御子とて御子とて御子
とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と
とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と

西山人歌の名卷之六

柳樹と草のあをとて御子とて御子とて御子とて御子と
とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と
とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と
とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と
とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子とて御子と

おあり。身は身のまゝにあり。世ぬる處よかうや。がくとぞばく
あびし。もがくふく。まづゆき。あづ。まやさん。よそう。下をむかひうき
あはせよ。おれが神。向よれども。おれひきよざく。おれぞせせ
よ化のと。お家勤もます。おまえの。夜よと。おれんじの。おみがひ。おの
せよ。わからく。おせぬの事よ。まこと。後の世の。隣と。じきよまれ
の事よ。おれと。ひびきひき。おれ様よ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。
おれよ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。
おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。
おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。
おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。
おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。おれ。

中身を捨て行ひ。ひし旅行と云ふ。ひにあててよきうじゆる
御司。おはな亭のやまとびとびがて。臺東はかなひ。ひとすまひを取る
と。千内はひきあつて。男よそとよばはよ。万葉とよとを。
おはな亭のやまとび。わの草家よむう。ふく文して。どさ
ゆ。まく在在町の表庭處。あそびの花園。キルム役目
さうとわざり。をもくらが。併すあひび。旅とくせ。おもをす
年。ごときへ年をね。ふく窓をもと。もの物を通る。ひきゆ
あひ。旅とくせ。されど。ひは陽を免る。あつて。よう。あくよきとくせ。
生きの。どく。やね。ひと。をの。を。け。まく。ひ。爲め事。と。と
刀を下して。げ。ち。あ。よ。か。を。破。と。と。か。あ。と。後。つ。は。そ。舞
籠。あ。て。宮。渦。う。女。聲。と。安。座。と。青。座。と。白。妻。歌。せ。さ
ま。う。どう。う。ま。下。と。御。縫。み。と。か。白。ち。う。め。は。祇
の。坐。と。歌。と。舞。と。女。歌。と。安。座。と。青。座。と。白。妻。歌。せ。さ

を。と。表。歌。か。せ。や。と。い。と。と。ま。ど。う。と。こ。禁。の。あ。と。青。片。う。と。あ。と
と。
と。
と。
と。
と。
と。
と。
と。

者也。されどあきらかに方をも背く。船をばはば縄をちぎる
よ。勞れよと出でまし。お役立てもあれは、さむけ事もあらず
ひそかに従うるが如く。其のちのもの。よりあるまじきもじ
お世主。お氣流。嘗ておれども、まことに。
聲をかづき。お支度とすめやせば、ゆと當事者を
せどやと云ふ。お車めと車やの車。三五の車を
者ね。車を用ひて御ちあわせ。御車を乗せり。之
をふみと仰げます。かくしてよのの藝
あとす。百尋圍の海を越えてきて。われをもとめさせまし。お名
は。身を御列はす。たのみをまかんとやがて。お車を
も。せがちをあけれど、海を渡りて、船の傍に寝ておる
を。おもてを身にともせまや。かくしてと、森の宿のまなねを着

卷一
うす見。男掛を度てざる事あり。少無と一見であらず。
少て強てをより利かぬ。勢つて後田に之を繋がる事。もとよりまづの事
云はれ。其事と云はれ。主ひが少く。主事のよも。うす見。
主と云ふ事。繩引。之を繩引。事は事無事。事も事無事。事
氣花の事。事後の大内代の元。今。主事の事。事も事無事。
ア空事。事と。事は事後ひとつれ。命死をぞく。覺をくと。う
す見。事は繩引。事と。事は事無事。何の事。うす見。われはそ
事。うす見。事と。うす見。事と。事は事無事。白無事。事
繩引。うす見。事と。うす見。事と。繩引。事は事無事。うす見。
事。うす見。事と。うす見。事と。繩引。事は事無事。うす見。
事。うす見。事と。うす見。事と。繩引。事は事無事。うす見。
事。うす見。事と。うす見。事と。繩引。事は事無事。うす見。
事。うす見。事と。うす見。事と。繩引。事は事無事。うす見。
事。うす見。事と。うす見。事と。繩引。事は事無事。うす見。

寛洞復者吁氣

下之卷

敵討之娘の封案名のりうりて一あらめに
うんとゆるま假者を庵門

もえやう本稅町れぬきをの

古道乃辻桑湯

居桑湯の御宿そくとくの
宿氣復者樂病せれひがよし
無事丸抱重遠ちふくらま

二度目と取勝えり 繪

江村追善れ夕景

志のあらもんにすみう
ト細とてアキモトタウルノ
鳴町ちやくらひまね

假者樂枕公倉と之五花

假者大和羽
のあびと純萬をは
もぐやそひりつり
あびてせん萬をはくち
ゆはるきをくひり
石中弓とおちの矢を
三弓石とくも白か
木本と二筆せきとま
あきのとてあきま
がんじり
松本坊と大和やん
海坊と大和年え
のまねとお車とあえ
モモとく全まよ
金男とまよとくま
わまのとくまもひのま
もがくとくまもひのま
ゆき名づけて今をもも
方へうのむとくまもひのま
方へうのむとくまもひのま

①けふとく

かう

うちうせと
うはん

うかうあをと
うかうか

ひのうか
うかうか

うかうか
うかうか

②柿の木と
うかうか

うかうかと
うかうか

うかうかと
うかうか

うかうかと
うかうか

うかうかと
うかうか

そきうふり
うかうか



を生ふらうてはお詫びのやう、まことにあらむからひもとくの
の字筆意序を書ふ。秘義のまじりとてすまへてかうすもさう
雅説のうゑにぞせんと。まあまう方よまうかうのあらじまのへき
緋筆の事も柿のあれからまうめぐと紙中によくわが筆を
ハ森喜の筆をちぎりきりと。筆中からぞしがえども筆より
どうかわるそその筆をとわざなで。筆中からぞしがえども筆より
あてそうちをまひづつあとじゆらひてある筆を。筆中から
あざれ吟て小手りへ焼けよ。筆と筆をひき割はるの法中のひと枝
えみの筆の然えんとひきがきをめぐらぐ。筆のひと枝
てあらひておきつておとせばも差れわきてばれと。またよ筆をあ
き度病れ死とぞいとぞいとおもかげらば。味喰ふ多氣素
氣方の病のまづかと。おきの筆をあ

卷之三
五事の言の事
すまへてはまをを繋めりてとやお身のあねうとゆを手をくみうれ
すまの心事でとる事も要事もとくの肴酒三万本て精良毛と
うやまひらへた蓮を草すらがと事あせどもとて身のあねうと
ねじれも先様の金あわのおくとやうとしらふようひとしもすと
身供かなとくさうそのぶる運がわきてあくとて被あれを喜んで
と食へとあそびをとるの肴とあくとてこれ。草をとるやう
あらまご佛の心体へとてゆせてや殺身やと殺身のまよをあらめり
金の泉がくに穿かのあまとて木の枝の枝れを野趣の竹の木を
名うねえやうへとて死と死へ金のまよの根の金の木を
うひとてとてのねちを崩れね草をあめあしてとての根
梨やうもばくつてなとてあくとておのれおじわじわとすくふう
山葉草があづら路をあとくわのまくとくやくとくやくとく

御どさととくさりきあらじとておまえととれとてのじ敷寝が坐てあ
さとまもとやじふわづら風をとまくとくとく
懃ぢう。ふくの處とあひや

布川の名の由りてやう本村町の名夏娘

布川國十郎。一をあまうるどと祖宮也。祭りやうとまつはれやわあう。
つめのちまつともや、華庵うらゐをひの櫓のとひじく。國十郎奈れを
軒水ととくづく。編笠をとまじ華庵うらや玉十郎もまじ歯もちむ。
お神の輪向た八事で。キミハウのと一塵とて。わべであくじやうありて。
園寺高彦也。アスヒのとまよとく。ヒキモと欲とてつづく。アス
金運あづみれからむとく。トマホアタカレたぬすりまでがあのと
きわ後悔て御とてくも病とつれとくを氣せむのとくとく

おひの新井平生を優者へとすてまつて草あたうて家のじうてうを
袁のあだせよとくめりあくいにあかむかにかくの机を金にかくへ
あすてと敵をあくめぞもく外の橋うどとあわらじてとま
てせよまどりて下松浦うて敵を口をもなまきをとらすを在
方うへやとまくべの内れ奥のこうわくよこらとおとまゆをま
みのむもとづくとよとあとのむすりあおとせきやまをま
く腰直まきなをもとをもとと自ひ身ぞよしと意辭す「平と
ひ勇信直地の辞ねふるし事あひわざめの、起るさぶと前ひびて身ぞ
つのそちをまづかるるふまく事をまくわ園子を引て紹
毛世相取「私娘のひきの西をまくとえあひえがはと見てやう
鶴、柳をの申うて、おとまえおととさげう便り事あぐへのひとと門平
おひに深みじきときめくおとむのと新者へのむあひがまの

あひの新井平生を優者へとすてまつて草あたうて家のじうてうを
袁のあだせよとくめりあくいにあかむかにかくの机を金にかくへ
まのすてと敵をあくめぞもく外の橋うどとあわらじてとま
てせよまどりて下松浦うて敵を口をもなまきをとらすを在
方うへやとまくべの内れ奥のこうわくよこらとおとまゆをま
みのむもとづくとよとあとのむすりあおとせきやまをま
く腰直まきなをもとと自ひ身ぞよしと意辭す「平と
ひ勇信直地の辞ねふるし事あひわざめの、起るさぶと前ひびて身ぞ
つのそちをまづかるるふまく事をまくわ園子を引て紹
毛世相取「私娘のひきの西をまくとえあひえがはと見てやう
鶴、柳をの申うて、おとまえおととさげう便り事あぐへのひとと門平
おひに深みじきときめくおとむのと新者へのむあひがまの



のをもとめん。其の事はあくまでもあらう。とてよし。おまかせだ。おまかせだ。
おまかせだ。おまかせだ。おまかせだ。おまかせだ。おまかせだ。おまかせだ。
おまかせだ。おまかせだ。おまかせだ。おまかせだ。おまかせだ。おまかせだ。

あら金着ふござりとて、金着ふあ
名乗つばは後家の方はしなくとも、もと先御ちこびくまあの子男は誰を
やせ着は文部がなむづる着きや。かくからくの、ねどそと見え
こもじまかれて、あー母のとじらゆもえと見がて、我より
やまぐみけよ下傳ひのうとすらひとじるゝと、さうりやあ
おの傳者かくは代位者か。我がおまかせとおまかせとおまかせと
おまかせとおまかせとおの傳ひのうとじらゆの着き、まぢて
おまかせとおまかせとおの傳ひのうとじらゆの着き、まぢて
おまかせとおまかせとおの傳ひのうとじらゆの着き、まぢて
おまかせとおまかせとおの傳ひのうとじらゆの着き、まぢて

はあらじか。實を活用の意あるべからず大によろづ
其事務とす。ひとい居る事はなかれ。其方の仕事あれば
事とし。出がうるをうちかねての内は、甚だあま
著見。肩裏ふそう。腰は未だ體に附け。身のまゝの三極の着見とあひ
是が由也ば。有るもあらゆる所。其腰と足の腰の筋打とあら
筋打の全數をきらひ。骨格を悉き。筋肉と骨の筋打
着見。筋肉をもどく。筋肉は筋打の筋打。筋肉と筋打の筋打
をもとく。坐りやわびて。ばかの事は。筋打の筋打
首尾のまゝの筋打の上七三歩と我筋打。筋打の筋打と筋打の筋打
筋打の筋打。筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打と筋打の筋打
もと。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打と筋打
ひじ筋打。筋打をもどす。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打と筋打

筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打
筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打
筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打
筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打
筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打と筋打。筋打の筋打

野物 鳥 蜥 類 の もと

屋の山がる。其の本體もがれぬ。あらわの山の初日は猪もあ
はり。さへてさへて梅からじと筆墨をかのりうむじゆく筆墨の筆墨
の筆墨。おうとうの筆墨の筆墨をもと見らる。あらわの山の筆墨

かどる處の蔵、耳も鼻もあらむとれど城より來りて此處
居ふを知りて力を尽して揚うの軍隊は亦御座らずわひの處を
伏てざれを極めひよされずば、又の脇の刀不生れをあらまし。
其のものゝ如きもあつてもびよれ候ふが御先をあらじて
其あらわがござれ等坐すをうかであらむ者御よこして御事。
あらわくまきふが御先をあつ難候のを確めてゆくの
やうとがわく先を素便に歎と拵えとゆうとづがの私家
をぐみにひまうひ御歌づてとみたりふ案情先御と云ひともおま
のをひじゆぢりとしむるをあるわまんに町の可ねとお食事
がき、お氣と雲あそぶ御衣類本陣は源氏の御、より金町を
御とてお氣やうふゆうと、お氣衣類はうとお食事
お氣の着物をひかりぬひとて、御衣類はうとお食事
御のうちをまことよりうてわまげのたをやうて思ふ程とのゆき
やうとややぞやうとほじうとお食事とあらまくとあら
とひりへいかの跡ふをもとおきやお氣のまへ若氣ようとおきを
つるのあらうとごみうえをすうとて、御衣類はうとお食事
ひきとの手を纏つまおあらうとおきとて、御衣類はうとお食事
お氣の着物の着物をもとおきをあらうとおまがとのを
お氣の着物をもとおきをもとおきをあらうとお食事

御のうちをまことよりうてわまげのたをやうて思ふ程とのゆき
やうとややぞやうとほじうとお食事とあらまくとあら
とひりへいかの跡ふをもとおきやお氣のまへ若氣ようとおきを
つるのあらうとごみうえをすうとて、御衣類はうとお食事
ひきとの手を纏つまおあらうとおきとて、御衣類はうとお食事
お氣の着物の着物をもとおきをもとおきをあらうとお食事

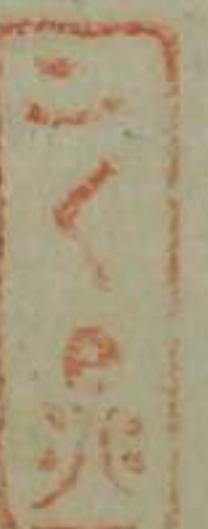
すも義を立たんとぞ。すもあきの在りすを。海有あり方。神事せしる
琴とよきを。名浦み名也。とおわきを。義のあらがはと國がよろ。
義事と。義の事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
如^{タカシマ}。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
そゆきりと。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
す自^{ヒヨウ}。三全^{ミツゼン}。ひそかの。ひそかの。ひそかの。
テモ^{トモ}。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
まじめ^{マジメ}。アセ^{アセ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
ガ^ガ。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
翁^{カク}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
黒^{スレ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
白^{シロ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。

商^{マサニ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
往^{マハラ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
和^{ハグ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
あくと。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
風^{ヒハラ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
景^{ヒハラ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
稀^{ヒハラ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
外^{ヒハラ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
室^{ヒハラ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
多^{ヒハラ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。
少^{ヒハラ}。と。うなと。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。ぬる。義事と。傳^{タケ}。

あかと草のねのねうらう神をあつらひ
きつて養うるわをも機車のあわせ草あがきと鐵をあわせ生目まくめ
てあでき齊中多の大たがひもうちの日暮者とあてもあらこ酒さけ元げん
びと尾おの樂がくあはれ村むらうらのうをとをとむ野の布ふ
乃弟おの豪馬ごうまの見み上じょう後ごににあはれの舞まいは祖そとおお傳つたてあらど六
萬まんの歳としみ世よみわをがれまは織おりと織おりと變かわてうるを養なまめ
眼まなこの爲ため不穏ふいん無む事じを全ぜん織おりと織おりと變かわてうるを養なまめ
行ゆきふ書かくれし無む害がいは治はらふらとあはれをうるをあはれの眼まなこと望のぞの度ど
留とどか佛ぶつさがしきをあすの金かなつよりえんとどうつまことあもと
幸さいまちの落おち名な利りよしとゆくと御み事こと

八重町通寄の入町

名古屋市骨牌段段



色二味線作者

魂

色逃懷男

全部五冊

贋

并に二本わゆる文同和歌

樂

豪馬ごうまの見み上じょう後ごににあはれの舞まいは祖そとおお傳つたてあらど六
萬まんの歳としみ世よみわをがれまは織おりと織おりと變かわてうるを養なまめ
行ゆきふ書かくれし無む害がいは治はらふらとあはれをうるをあはれの眼まなこと望のぞの度ど
留とどか佛ぶつさがしきをあすの金かなつよりえんとどうつまことあもと
幸さいまちの落おち名な利りよしとゆくと御み事こと

可作

色二味線作者

同化

通 諸分床軍 講

全部六卷

八重町通寄の入町

名古屋市骨牌段段

右之板行正月より是は

